



対句のパワー

今読んでいる本は、ちょっと前に朝日新聞の書評（日曜日）で採り上げられていた中村圭志さんの『宗教のレトリック』（トランスビュー、2012）。「宗教の～」とタイトルにあり、中村さんは宗教学の人なのであるが、この本はむしろ「レトリック」、つまり、隠喩・直喩・提喩・換喩・誇張・列叙・対比・逆説などの表現技法について楽しく学ぶことができる本になっている。ちょうど、漢詩で対句をやったところなので、それに関連する部分を引用してみよう。

＊

対句は、隠喩や誇張と並ぶレトリック技法の代表である。呼び名は対照法でも対句でもいい。対句といえば、誰しも中学や高校で習った漢文や漢詩を思い出すだろう。言葉を対照的に並べると恰好がつくし、説得力も増すということを我々が意識するようになったのは、五言絶句だの七言律詩だの鑑賞を通じてであった。（中略）

たとえば「学んで思わざれば則ち罔し、思うて学ばざれば則ち殆うし」（為政第二）というのがある。意味は、せっかく勉強しても自分の頭で考えなければ、分かっているのと同じことであり、逆に、自己流で考えるだけでちゃんと勉強しなければ、いかにも危ない、ということだ。表現の形式性が目立つが、立派な思想を表明している。

こういう対照は、「ドイツ人は考えから走る、スペイン人は走ってから考える」みたいな国民性談義にも似ているし、もっと偉そう

な「内容なき思惟は空虚であり、概念なき直観は盲目である」（カント『純粹理性批判』）にも似ている。似ているだけで言っていることは違うようだが、ひとつの傾向として、こういう対句的な言い方をされると、意味内容を理解せずとも分かった気がするということも本当のところだ。そういう分かり方は、内容のない思惟なのだろうか？ 概念のない直観なのだろうか？

要するに、対句表現は歌のように調子がいい。心に印象を残す。内容も概念も度外視して暗記するのにふさわしい。

他の例も見てみよう。「知者は水を楽しみ、仁者は山を楽しむ」（雍也第六）。なるほどなるほど。なぜ頭が切れるとリバーサイド派となり、人間ができるとヒルトップ派になるのかは不明だとしても、印象は鮮烈だ。「朝（あした）に道を聞きては、夕べに死すとも可なり」（里仁第四）。いかにもいかにも。夕方に死んでもいいというのはけっこう過激な主張だが、これは一個の象徴的小宇宙なのだから気にすることはない。朝と夕というの是一日のすべて、人生のすべての時間のことだ。

＊

まじめな文章でありながら、そこはかたなくユーモアが漂っていることが分かるだろう。ちなみに、仏教の開祖ブッダ（「目覚めた人」の意）の本名はガウタマ・シッダールタ（日本と同じで、姓+名）だが、その意味するところは「すぐれた牛・願いがかなった」だそうである。結構笑える。